

| | |
|---------|---|
| 氏名 | ジェレッド アーネスト ハンセン Jerrod Ernest Hansen |
| 学位の種類 | 博士 (人間・環境学) |
| 学位記番号 | 人博第246号 |
| 学位授与の日付 | 平成16年3月23日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 研究科・専攻 | 人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻 |
| 学位論文題目 | CULTURE, SELF, AND STUDY ABROAD: THE EFFECTS OF LIVING IN CANADA AMONG JAPANESE HIGH SCHOOL STUDENTS (文化と自己と留学の関わり：日本人高校生におけるカナダ留學生活の効果) |
| 論文調査委員 | (主査) 教授 杉万俊夫 助教授 三谷恵子 助教授 ハヤシ ブライアン マサル |

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は「文化」と「自己」との関係を、異文化環境に置かれた「自己」の変化という視点から取り上げ検討したものである。論文ではまず、「異文化適応 (acculturation)」に関わる諸相が文化心理学、社会心理学のさまざまな概念的枠組みに照らし合わせながら検討され、それをふまえて留学体験という具体的事象を通し体験者の行動や考え方にどのような変化が起きるのか (あるいは起きないのか) という主題が、留学体験の前後における語り (ナラティブ) の変化に基づき考察されている。

論文は三部より構成され、第一部が問題提起、第二部が理論的考察、第三部が事例研究を中心として記述されている。

第一部は第1章と第2章からなり、第1章では序論として本研究が心理学、社会学、文化人類学などの境界領域的考察として位置づけられる課題であること、またこれらの領域において近年注目されているナラティブの手法が援用されることの意義が主張され、ついで第2章で本研究の着手に至った申請者自身の動機が述べられる。すなわち米国出身の学生としての申請者の問題提起の出発点が、異文化適応を通して自分自身の中に二文化共存の自己が形成される過程そのものにあり、考察者であると同時に体験者でもある申請者の視点が本論を論じるうえで重要であることが示される。

第二部は第3章から第6章までを含み、本論文で扱われる主題に関連する方法論と理論について検討される。まず第3章ではエスノグラフィー、バイオグラフィー、ライフ・ヒストリーなど、比較文化研究において用いられる様々な手法とその意義にコメントした上で、本研究では、エスノグラフィー的立場を精神的基盤としながらも、文化的変化の移行的諸相という流動的な面を掘り下げるためにバイオグラフィー的記述法が取り入れられること、特にナラティブアプローチが重要であることが主張される。続く第4章においてはデータ収集の段階で考慮に入れるべきフィールド研究の方法論がエスノグラフィーとの関連で検討される。第5、6章では「文化」「自己」「異文化適応」という、本論文が提起する問題の中心的概念について考察が展開される。まず文化という概念の文化人類学解釈が提示され、ついで「文化的自己」としての個人についての説明、文化理解のために個人の語り研究されることの必要性が述べられる。またここで日本とカナダの文化的違いをとらえるための「相互依存的 (interdependent)」と「自立的 (independent)」という対立図式が主張される。また「自己」と「文化」を相互構築的な一つの「自己/文化システム」と見なすという文化心理学的概念の導入によって、本研究が解明しようとするものが、この「自己/文化」システムの中の文化的自己の本質であることが明らかにされる。

第三部は第7章から第11章を含み、具体的な事例研究とその考察が記述される。まず第7章で以下に続く章の概略が述べられた後、第8章で本論文が考察対象とした留学プログラムの詳細、すなわち留学の実施時期や高校生を取り巻く学校やホームステイ先家族などの環境が説明される。ここでは、本来短期間で集中的かつ浸透的な影響力を及ぼすはずの留學生活が、実際には留学を1月から開始するという実施時期の不適切さや交通の便の悪い住環境の制約などによって、高校生たちにカナダ社会に接する機会を大幅に制限していること、同時にこうした制約が逆に、ホームステイ先家族とのより緊密な関係形成を可能にするという実態が指摘される。このことはまた、ホームステイ先家族との関係が良好であった者はおおむね留學

を良い思い出として語っていることにも反映され、留学という異文化体験の質を左右する一つの要因として滞在先の住環境が重要であることが示唆される。第9章および第10章は留学後の高校生たちの状況に焦点を当てるが、調査した高校生たちは、異文化環境から戻ったときにしばしば発生する不適応症状いわゆる逆カルチャーショックも示さず、また本研究で当初期待された「カナダ化」という異文化適応の結果としてのより自立的な自己の発現もほとんど見せなかったことが述べられる。その否定的結果の理由としては、本来期待されたはずの文化的接触が希薄であったこと、帰国後留学生たちが直ちに、大学受験を控えた日本の高校生としての生活に戻るような環境的圧力の下に置かれたことなどが示され、こうした否定的結果に関する理論的考察が逆に、何が異文化適応において関与的かということへの示唆を与えている。最後の第11章では、1年間のホームステイ留学は結局、高校生たちに「異文化適応」の根底的な影響を与えるには短かったと結論づけられるが、この結論はあくまでも変化の一段階を観察した結果にすぎず、彼らがさらに成長した後、高校時代の留学経験がどのように影響するかなど、さらに検討すべき課題が残されることも言及される。

論文審査の結果の要旨

本論文は、留学という経験が日本人高校生にどのような影響を与えるかという具体的な問題の考察を通して、異文化適応 (acculturation) によって個人=自己が変化する過程とその要因を文化・社会心理学的視点から迫ろうとした意欲的研究である。

本論文において注目すべき点ならびに学術研究としての貢献は、以下にまとめられる。

第一に、本論文にまとめられた研究の今日的意義が挙げられる。異文化接触や多文化共存が社会生活の様々な場面で日常的現象となっている現代において、異文化交流による文化変容、異文化コミュニケーション、カルチャーショック、あるいは異文化環境から本来の文化環境へ戻ったときに受ける逆カルチャーショックなどの異文化体験・異文化接触に関わる主題は、社会学、心理学、文化人類学、およびこれらの学際的分野において複合的な課題として提起され検討されている。本論文もまた、こうした研究の潮流の中に位置づけられる研究であり、「異文化適応」、「文化的自己」といった概念を中核に、文化とそれを受容した形成する主体である自己との関係を留学という異文化体験者の語りと行動の文脈の中で読み解こうとする文化心理学的視点からの分析は、一連の異文化研究に新たな貢献を付け加えたといえることができる。

また具体的な考察を、高校の留学プログラムに向けた点も本論文の特筆すべき点である。異文化適応のあり方に関与する諸要因の中で、体験者に関わるものとしては、体験者の年齢や身分、異文化のもとに置かれる期間、その経済状況や生活環境などが挙げられるだろうが、高校生の1年間のホームステイ留学という条件は、体験者の若さ、期間の限定性、ならびに家庭と学校という特定の異文化環境という点で、一つの特別なケースを作りだしているといえることができる。このようなケースの研究はまだ十分な蓄積がない領域であり、その他種々の異文化適応のあり方への比較素材を提供すると同時に、教育課程として留学を実践することの意義を教育心理学的に検討するための手がかりを与えるものとしても評価される。

第二に、質的分析とナラティブアプローチの手法に注目する必要がある。申請者は、日本のある私立高等学校が実施する1年間の留学プログラムを考察対象として選び、これに参加した高校生約30名に留学前と留学後に個別に面談し、その語りと行動を通して留学の効果を明らかにしようと試みた。留学の効果については、これまで統計調査を用いた量的分析が主として行われてきたが、本論文が明らかにしようとする課題、すなわち、個人の中にある無意識の自己—言い換えれば特定の環境の中で自然に獲得される行動様式としての文化—がどのように変容するかという微妙な問題を分析するためには、集団ではなく個に注目することも重要である。その意味で、申請者があえて個人の語りを重視し、そこから異文化体験を経た学生たちの中にどのような文化的変化が見られるかを探ろうとした点は意義深い。

本論文では、申請者が調査した高校生たちに、留学前と留学直後で英語の運用能力に著しい向上が見られた以外には申請者が観察できるような顕著な言動の変化がなかったとされ、1年間の異文化体験が知識や学習的経験の総体としての「個人的自己 (personal self)」の変化には寄与するとはいえても、申請者の当初の期待に反して「文化的自己」にはそれほど影響を及ぼさないという結論が導かれる。本論文で援用されている日本とカナダの文化的自己の違いの図式、すなわち前者を「相互依存的 (interdependent)」、後者を「自立的 (independent)」というキーワードによって特徴づけ、それに基づいて「カナダ化」すなわちより自立的な自己の獲得を異文化適応の形態として予測したことは一面、問題の単純化にすぎるとも

いえるが、このような結果に至った事実的背景として、申請者が指摘するような留学プログラムそのものの不適切さ、日本の高校教育のあり方そのものなどが推測され、それは皮肉にも日本の文化の一つの諸相を浮き彫りにもしており、関連諸分野の研究にさまざまな示唆を与える研究と評価できるであろう。以上を総合して、本申請論文は、文化・地域環境学専攻、文化環境言語基礎論講座にふさわしい内容を備えた優秀な研究成果と判断される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成16年2月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。